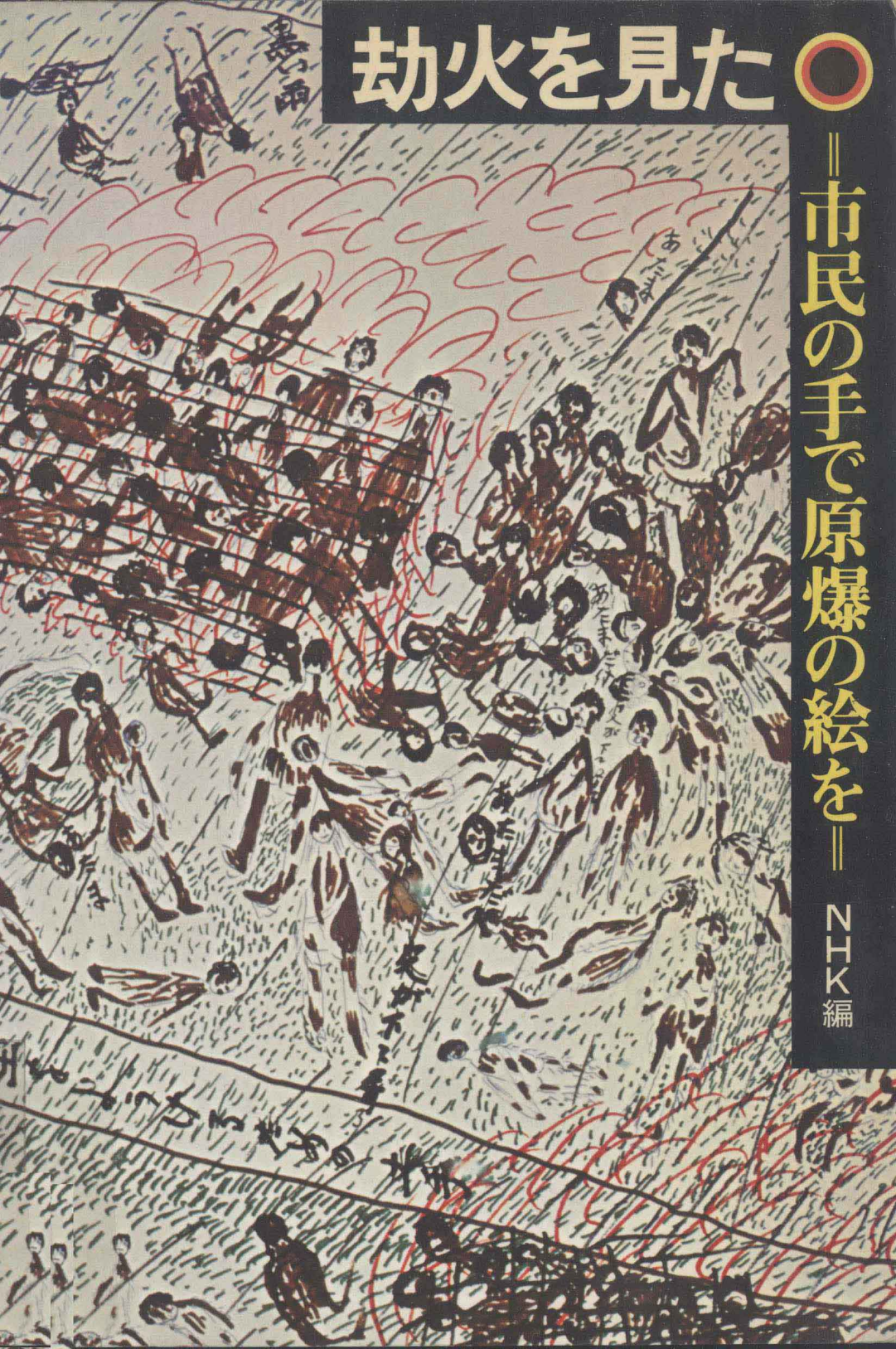


劫火を見た



市民の手で原爆の絵を

NHK 編



劫火を見た

市民の手で原爆の絵を

NHK編

日本放送出版協会

アート：荒田秀也

劫火を見た——市民の手で原爆の絵を

昭和50年7月10日 第1刷発行

定価 400 円

編集 日本放送協会©

発行者 浅沼 博

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1 郵便番号150 振替東京49701 電話東京464-7311

印刷・村谷アド 製本・石津製本

みなさまへ

市民の手で原爆の絵を残そうという運動は、昨年五月、NHKの呼びかけで始まりました。広島市内に住む一人の被爆体験者が、NHK中国本部にお寄せくださった一枚の絵が契機となったのです。この運動の反響は予想外に大きく、遂に一千枚近くに及ぶ絵の数かずが寄せられて来ました。これらの絵は番組を通じてご紹介したのは勿論ですが、実際に見ていただこうと広島市のご協力を得て、平和記念館で八月一日から六日まで展示会を開催いたしました。会場は、絵を見る人びとの熱気と感動で連日埋めつくされました。会場に備えつけた感想ノートは十数冊に及び、国内はもとより海外でも展示すべきだとか、画集として、もっと広くこの悲惨さを知らせるべきだとの要望がびっしりと書き込まれていました。

被爆三十周年を迎えたいま、ヒロシマの被爆実態は風化しようとしています。それだけに『ヒロシマを繰り返すな』と、日本のみならず世界に訴え続ける必要があるのです。いまここに掲載された絵は、被爆者のみなさまから寄せられた絵のほんの一部にすぎませんが、核兵器の増大と拡散が人類の生存を脅かしているなかで、画集となって出版されることは、まことに意義深いものがあります。

絵には被爆者の脳裏に三十年間焼きついて、消し去ることのできなかった当時の惨状が、時間を超越した見事なドキュメントとして再現されております。写真とは異なった驚くべき迫力は、被爆体験者のみが描きうる貴重なものといえましょう。被爆者の心の叫びを、画集となったこれらの絵の一枚一枚から、一人でも多くの方がたにくみとっていただけることを願ってやみません。

出版に際して、『市民の手で原爆の絵を』の運動に参加された数多くの方がたをはじめ、関係者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

昭和五十年六月

NHK中国本部長
松本宗次

その日の広島

その朝……

昭和二十年八月六日の朝、広島は瀬戸内の夏特有の雲一つない青空の下で、一日の暮しが始まっていました。

すでに三月、東京大空襲では都民に十二万の死傷者が出たのを始め、全国の主要都市が、米軍の猛烈な爆撃によって炎上、非戦闘員の市民が無惨な姿で次ぎつぎに亡くなっていました。

四月、沖縄本島に米軍が上陸、全島が戦場と化し、九万の守備隊が全滅、十万人の島民が亡くなりました。

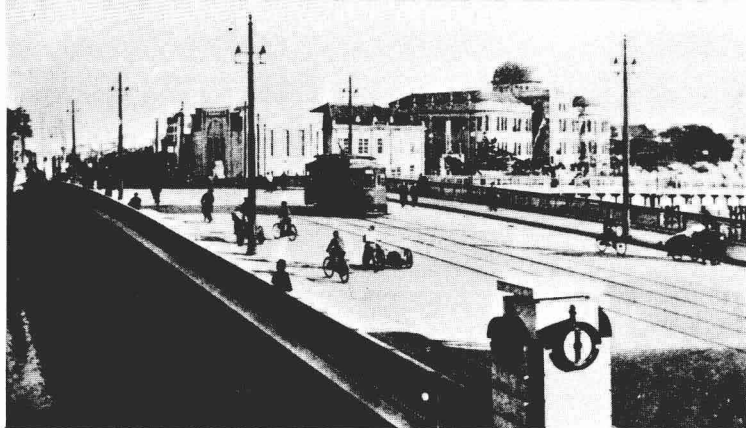
“本土決戦”がかん高く叫ばれるなかで、しかし広島は、ほとんど無傷のままだに残されていました。市民の間では、「広島は安芸門徒の多い宗教都市だから、米軍も爆弾を落さないのだ」という流言さえさやかれていました。実は米国は、原爆の効果を正確につかむために、広島に対する爆撃禁止命令を出していたのですが、もちろんそのことを、だれも知るよしもありませんでした。

中国山地から瀬戸内海に流れ込む太田川河口の三角洲に発展した広島は、明治政府の富国強兵策にのっとり、帝国陸軍の戦略的中心地となりました。宇品港からは、全国から集められた兵士たちが、大陸の戦場へと続々送り込まれて行きました。広島は、戦争が拡大するにつれて、ますます繁栄した軍都でした。

八月六日未明、広島市内には、ひさしぶりに空襲警報が発令されました。午前七時すぎ、ふたたび空襲警報が発令されましたが、七時三十一分には解除されました。軍事施設や軍需工場の屋上に陣どった対空機関銃座の兵士も、防空体制を解きました。

市内を流れる七つの川は、折からの満潮に、真青な夏空を映してよどんでいます。大小の橋の上には、防空頭巾を背に、ゲートル、モンペ姿の市民が、足早やに行きかっています。満員の市内電車には、学徒動員で軍需工場に急ぐ女学生も乗っています。郊外の農村から、下肥をとりに来た農民の荷馬車が、のんびりとひづめの音をたてて通りすぎます。そうした橋の一つに、原爆投下目標となったT字型の奇妙な橋、相生橋あいおいばしもありました。

ぎっしりとたてこんだ瓦ぶきの家並のあちこちで、小さな土煙が上がりました。強制疎開による建物の取壊し作業が始まったのです。勤労奉仕の婦人会や、近郊の国民義勇隊員、それに中学生や女学生たちが、近くの木陰に弁当を



置き、汗とほこりにまみれながら、長い一日の作業にとりかかろうとしていました。

課長の朝の訓辞が終わって、仕事の始まった官公庁や事務所もあります。国民学校では夏休みとはいえ、田舎に疎開していない学童の授業が行なわれており、朝礼が始まっていました。

路地では、幼い子どもたちが元気に遊びまわっています。

外国人もいました。植民地だった朝鮮半島から強制的に連行されて、軍需工場で働かされていた朝鮮人が数千人、それに東南アジアからの留学生や、撃墜された米軍パイロットの捕虜もいました。

……その時、NHK広島放送部に、とつぜん軍管区司令部から警報発令を合図するベルが鳴りました。スタジオにとびこんだアナウンサーが、「中国軍管区情報！ 敵大型三機、西条上空を……」と原稿を読み始めた瞬間、メリメリッとすさまじい音がして、鉄筋の建物がグラッと傾くのを感じ、体は宙に投げとばされました。

閃光！ 8時15分

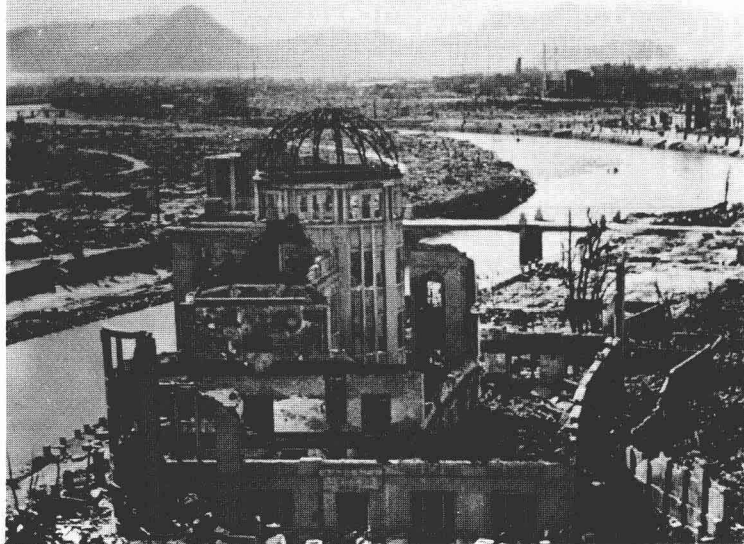
B-29「エノラ・ゲイ」号から投下された原爆「リトル・ボーイ」は地上570メートルで青白い閃光とともに音もなく炸裂、爆心には直径100メートル、中心の温度30万度に達する「火の玉」ができました。同時に、黒煙と白煙が全市を覆って、高度数千メートルに達しました。爆心直下には、1平方メートル当たり4.5トンから6.7トンにも及ぶ爆風が襲いかかりました。

この熱線と爆風によって、爆心から半径2キロメートル以内の木造家屋は、ことごとく崩壊して炎上、炎は二日後まで燃え盛りました。

爆心近くにいた人は、自らの影だけを残して蒸発、あるいは黒焦げの死体と化しました。一命をとりとめた人も、衣服は裸に近いまでボロボロに焼け焦げ、皮膚がめくれてたれさがるといふ、ひどいやけどをこうむりました。

市民たちは、水を求めて、手近かな防火用水へ、川岸へと殺到します。

爆風によって押しつぶされた家の下には、肉親や知人が、助けを求めて泣き



叫んでいます。しかし、もう炎が自らの身を焦すばかりにとりかこんでしまいました。

やがて、真黒な大粒の雨がたたきつけて来ました。それは、泥と灰と放射性物質を含む死の雨でした。

燃えさかる炎と降りしきる黒い雨のなか、やけどのため皮膚のぶらさがった両手を、幽霊のようにたらしめた人びとの群が、郊外をめざして、えんえんと続きました。

「水をください」

軍隊を始め、県、市、警察などの防衛機能はほとんど壊滅しました。そうしたなかで、自らも負傷した医師や看護婦によって医療活動が始まり、被害が軽微だった軍隊の手で救出作業も始まりました。

病院はすぐ満員になり、救護所にあてられた市周辺や郊外の国民学校も、つめかけた負傷者でふくれあがりました。

市中には無数の死者と、虫の息の重傷者が路上や川辺に放置されています。

想像を絶する多数の負傷者のため、医薬品はまたたくうちに底をつきました。治療らしい治療も受けられず、人びとは「水をください」とうめきながら息たえて行きます。

いわゆる原爆症が現われました。赤痢のような下痢をおこす人、頭髮がばさっとぬけおちる人、皮膚に紫色の斑点が地図のように浮かび出た人、そんな人びとが、体中に大きなうじ虫のはうにまかせて亡くなって行きます。

救援隊とともに、肉親を求める人びとが、余熱のこもる市中をくまなく探し歩きました。そうした人びとの目に映ったのは、るいいるいと積み重ねられた死体、川面を埋めつくす死体でした。なかでも、幼い子をかばって死んだ母親の姿が、この無差別的な「新型爆弾」の残虐性と、戦争そのものの恐ろしさを、



人びとの胸に深く刻み込みました。

こうして後から入市した人びとのなかにも、二次放射能障害に犯され、亡くなる人も多数出ました。

死体は、市内のいたるところで、何日にもわたって“処理”されました。焼け残った木材の間に、何十体と並べられ、積み重ねられ、油をかけて火がつけられました。死臭と読経の音が、一面の焼野原に満ちていました。

そして八月九日、二発目の原爆が、長崎に投下されました。

平和の訴え

七十年間草木も生えないといわれた焼跡にも、秋にはカンナの花が咲き、放射能の影響で、雑草が異常な勢いで生い茂りました。

被爆一周年、焼跡にバラックが建ち並ぶ町で、町会連盟が中心となり、「平和復興祭」が開かれました。占領下で、言論と集会がきびしく制限された状況の下に開かれた祭でしたが、各町内からは、「世界平和は広島から」などのスローガンを書いた横幕や弔旗をかかげた市民が数千人も集まりました。

翌昭和二十二年八月六日、「平和祭」と名を改めた市民集会で、第一回の平和宣言が、浜井市長によって、世界に向けて発せられました。「戦争の惨苦と罪惡とを最も深く体験し自覚する者のみが、苦悩の極致として、戦争を根本的に否定し、最も熱烈に平和を希求する」。

しかし、二十四年九月、ソ連も原爆所有を公表、二十五年一月には、米大統領が水素爆弾製造命令を発表、その五か月後には朝鮮戦争が勃発します。イギリスも核実験競争に参加しました。

二十九年三月一日、静岡県焼津のマグロ漁船「第五福竜丸」が、南太平洋ビキニ環礁付近で操業中、アメリカの水爆実験による「死の灰」をあび、秋には無線長の久保山愛吉さんが、放射能症で亡くなるという事件が起きました。その水爆は、広島に投下された原爆の、600倍を超える威力をもつものでした。

三月末、焼津市議会が原水爆禁止決議を行なったのをきっかけに、各地の自治体がこれに続き、四月には衆参両院が「原子兵器禁止」の決議を行ないました。

広島市と東京杉並の主婦の間から、ほぼ時を同じくして、原水爆禁止署名運動が盛り上がります。超党派的な人道主義から始まったこの運動は、全国で

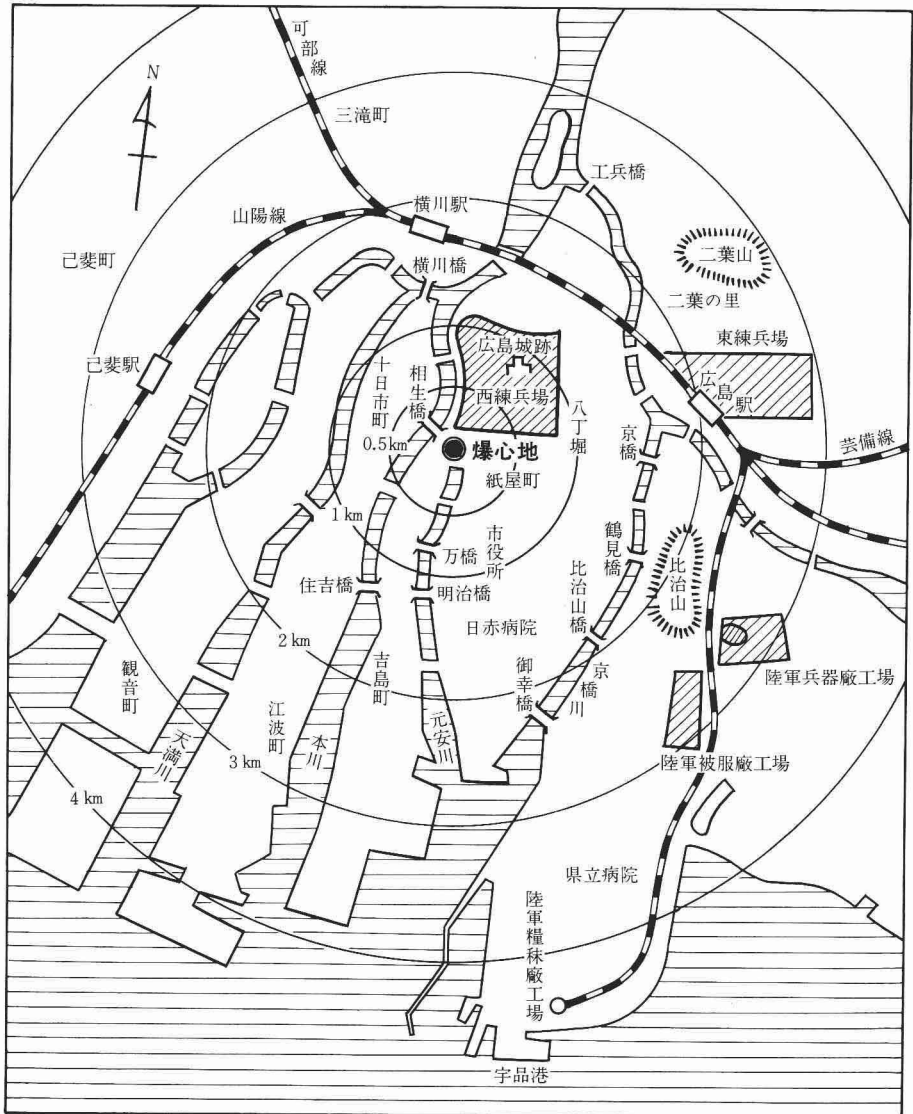
2,000万の署名を集める国民運動となり、「原水爆禁止日本協議会」が生まれました。

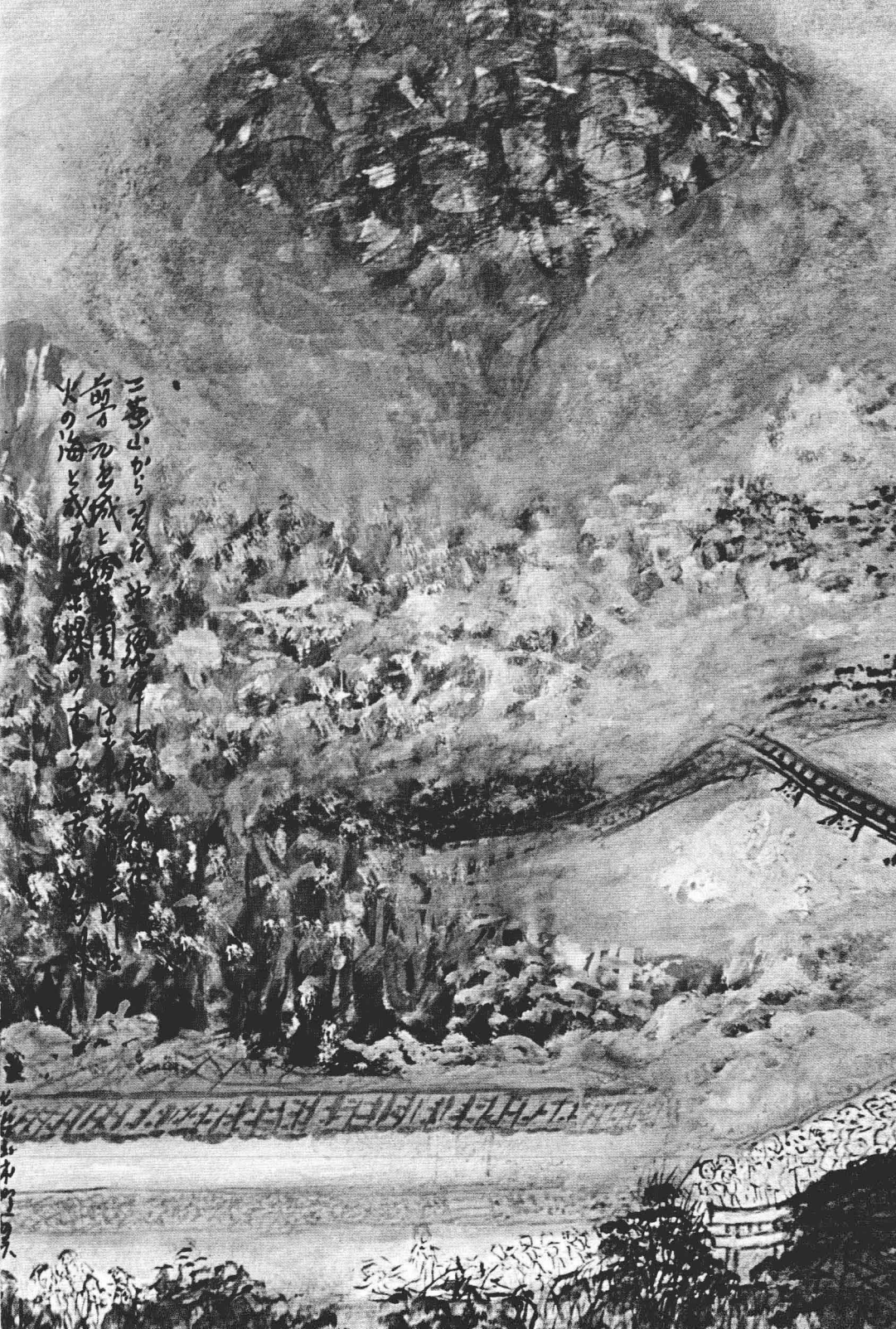
しかし、この原水協も、安保問題やソ連の核実験再開など、政治問題をめぐって深刻な対立が生まれた結果、政党の系列別に分裂し、多くの広島市民は、沈黙のなかにこもってしまいます。

昭和四十一年八月、現在平和公園になっているところにどんな町があり、どんな人びとがどんな暮らしをしていたのだろうかという素朴な疑問から生まれたNHK広島のテレビ番組がきっかけとなり、「爆心地復元」運動が始まりました。テレビのジャーナリストが、広島大学原爆放射能医学研究所の科学者と手をつなぎ、多数の市民の参加を得たこの運動は、人類最初の「核」体験をもつ広島が、原点から平和を訴えようとするものでした。平凡な市民生活の対極に「核」を見すえたこの「爆心地復元」運動は、その後広島市に受け継がれ、被爆三十年の本年、ひとまず国連に報告されることになっています。しかし、二十四万人と推定されている広島の原爆死没者も、いまだにその正確な数は調査されていません。

去年、NHK広島に寄せられた一枚の絵から発展した「市民の手で原爆の絵を」の運動は、「爆心地復元」運動以来の市民の熱い心の高まりのなかで生まれたものです。（この稿は広島市編『広島原爆戦災史』、広島県編『広島県史―原爆資料編一』、志水清編『原爆爆心地』、そして市民から寄せられた多数の「原爆の絵」によりました。）

広島市要図





三葉山から望む
所を山城と稱す
火の海と云ふは
此の山を指す

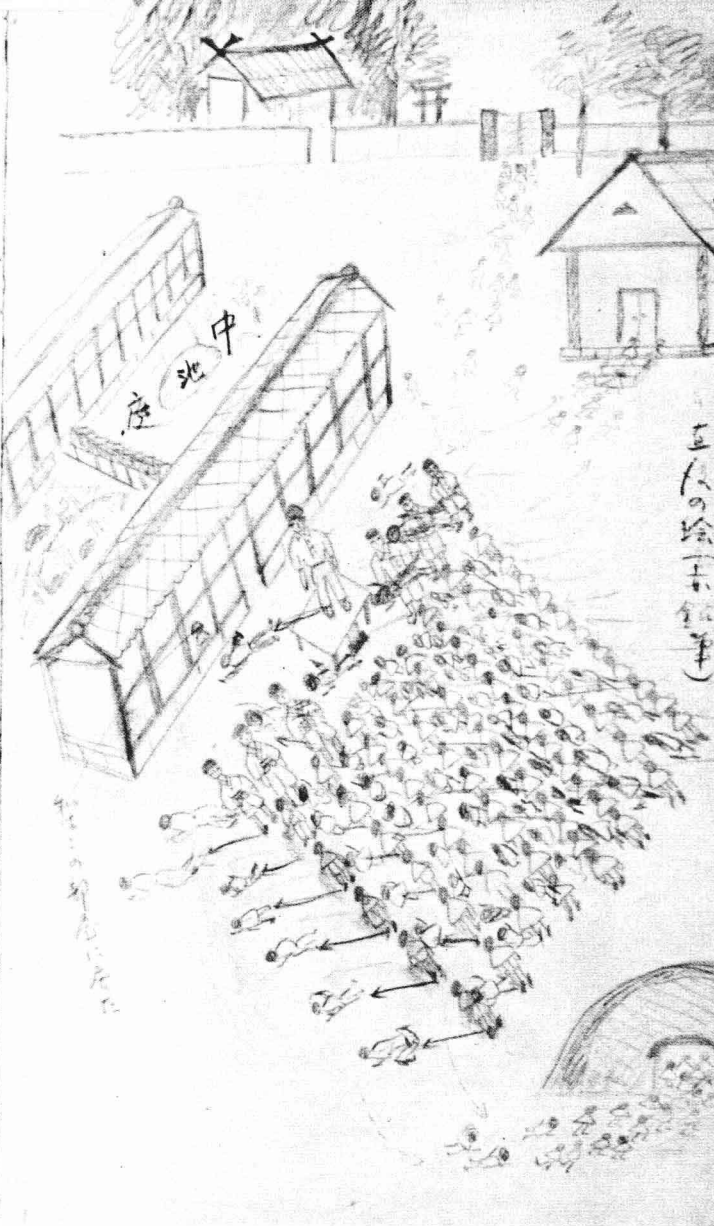
此の山を指す



竹内初二 58歳(896)



原田知恵 49歳(474)



(前略) 原爆投下時通行中即死なさったらしい方の遺体で体は仰向けになり何かをつかむ様に手を空に向け、その指は青い炎を出して燃へてゐました。指の先は青い炎を出して燃へてゐました。指も $\frac{1}{2}$ 位に短くなり変形して薄墨色をした液体が掌を伝って地面に流れてゐました。かつてはこの手で愛児を抱き…… (後略)



高蔵信子 48歳(340)



KAZUHIRO

石津一博 67歳(371)



井上三喜夫 71歳(36)

(前略) 私たちは、比治山のふもとを電車の軌道に沿って帰ってきました。ゆくさきぎきに、馬が倒れているのが印象的でした。余燼がくすぶっています。歩いているものには、人っ子一人逢いませんでした。ところが、御幸橋を渡った時です。橋のたもとに、パンツ一つの竹中先生が右手に握飯を握って立っていました。

電車軌道を隔てて、北側一帯はごうごうと紅蓮の焰が天を焦しています。軌道の遠く、大手町五丁目(当時八丁目)あたりも火の海です。

その日、先生は広島文理科大学には出講して